

洋 1 4 - 1 2 2 (ショートコメント)

「アバウトタイム～愛おしい時間について～」 ★ ★★

2 0 1 4 (平成 2 6) 年 9 月 2 8 日鑑賞<T O H
O シネマズ西宮 O S>

監督・脚本・製作総指揮：リチャード・カーティス
ティム（弁護士志望の若者）／ドナル・グリーソン
メアリー（ティムの恋人）／レイチェル・マクアダムス
ティムの父親／ビル・ナイ
ハリー（ティムの伯父さん）／トム・ホランダー
シャーロット（ティムの初恋の女性）／マーゴット・ロビー
ティムの母親／リンゼイ・ダンカン
キット・カット（ティムの妹）／リディア・ウィルソン
2 0 1 3 年・イギリス映画・1 2 4 分
配給／シンカ、パルコ

◆私は本作を観る気は全然なかったが、T O H O シネマズ西宮 O S で 3 本続けて観るについて、たまたま時間がピッタリだったことと、9 月 2 6 日付日経新聞夕刊の「シネマ万華鏡」で、ライターの岩永久美氏が星 4 つ（見逃せない）をつけていたため、鑑賞することに。その評論を読んでいたため、幸せを追う人々を描いてきた「ラブストーリーの名手」が監督としては最後の作品として仕上げたのが本作ということと、「タイムトラベルもの」だということはわかっていた。

タイムトラベルものは奇想天外なものが多いが、本作のそれは暗いところで拳を握りしめるだけで、過去にのみタイムトラベルできるというあっさりしたもの。ちょっと風変わりなのは、その能力はティム家の男だけに伝わる能力だということだ。そのため本作は主人公ティム（ドナル・グリーソン）とその恋人メアリー（レイチェル・マクアダムス）とのラブストーリーだけではなく、ティムとその父親（ビル・ナイ）との男同士の絆も強調されている。

◆本作の監督、脚本、製作総指揮は『ラブ・アクチュアリー』（0 3 年）や『ノッティングヒルの恋人』（9 9 年）で有名なりチャード・カーティス監督であることを前提として、前記岩永評論は本作を高く評価している。しかし、もともと内気で女性との恋愛にも積極的になれないティムが、タイムトラベルの能力を授かってからは、その能力をこまめに使って何度も恋愛の場面を修正している姿を見ると、「そりゃ、おかしいだろう」と言いたくなってくる。人生は 1 回こっきり、愛の告白も 1 回こっきりだから、緊張感があるのであって、失敗したらすぐにその場面にタイムトラベルして修正すれば O K では人間がだめになってしまうのでは・・・。

そもそもいくらタイムトラベルものでも、人間に与えられた 1 日の時間が 2 4 時間という前提は変えられないはず。したがって、ティムの場合だけなぜこんなに頻繁に過去にタイムトラベルして何度も過去を修正する時間があるの？そりゃおかしいだろう。次第にそんな気持ちが大きくなり、スクリーン上のティムに向かって、そう怒鳴りたくなってきたが・・・。

◆本作鑑賞後、この評論を書くについて資料を集めていると、2 0 1 4 年 5 月 3 0 日付のブログ「ただ文句が言いたくて」で、私と同じような「文句」が載せられていた。採点も 1 0 0 点満点の 3 7 点だから、かなり低い。そこには、私が言いたいこととほぼ同様のことが書かれていた。

ちなみに、岩永氏の評論では「時代がどう変化しようと、大事にしたいことはこういうこと。教訓劇に似た作品だが、お説教がましさは不思議と無い。こんな演出ができるのもカーティスぐらいなものだろう。監督業を退いている場合じゃない。」と書かれていたが、ブログでは「終盤になるとお約束通り、ティムの家族が亡くなります。それを機に時間とはなにか、人生とは何かを考えるようになり、「やっぱり時間って大切だよなあ」的な結論に持って行くシナリオになっています。何か失敗したらすぐに過去に戻ってやり直しばかりしてきた男に「今日が人生の最後の日だと思って生きないとだめだよ」とか言われても説得力なんかないわけで、「時間が大切だ」と説く映画のくせに、上映時間はしっかり 2 時間以上も取るという矛盾が許せませんでした。おい、視聴者の時間は大事じゃないのかよ。」と書かれていたから評価は正反対だ。

たしかに、リチャード・カーティス監督はティムが何度もお気軽に過去に戻り修正をくり返していく中で、やっぱり時間は大切なのだということを悟っていくというプロセスをストーリーとして描きたかったのだろう。しかし、私は上記のブログの文句の方に賛成だ。

◆別の情報によると、「本作はイギリス初登場 1 位！ヨーロッパ、全米、アジア、世界中が泣いた愛と時間についての物語」とあるから、映画の見方、評価はいろいろだが、さてあなたは？ちなみに、本作の原題は『A B O U T T I M E』だけだが、邦題はそれに「愛おしい時間について」というサブタイトルをつけている。これが近時の邦題の付け方の流行だが、こういう説明調のサブタイトルをなぜ付けるの？それって半分押しつけではないの？そもそも、時間だけは万人に対して平等に与えられるもので、いくら金を出しても買うことができず、若返ることも、死を免れることもできないことが古今東西の真理だ。

タイムトラベルによって過去に戻れるとしても、死を免れることができないのはティムの父親が言うとおりのものだ。したがって、本作の邦題についても原題通りで十分で、「愛おしい時間について」は余分。そう私は思うのだが・・・。

2 0 1
4 (平成 2 6) 年 1 0 月 1 日記